

批評・紹介

東洋學說林

神田喜一郎著

昭和二十三年十二月廿五日 東京弘文堂發行

A 5 判二三四頁 圖版四頁 定價二五〇圓

本書の收むるところ「明の四夷館に就いて」、「明の陳誠の使西域記に就いて」、「燉煌二十詠に就いて」、「支那古文學の研究」等十一篇、著者が大正の末から二十餘年間に發表された東洋史學關係の論文中より選ばれたものである。問題は多方面に亘つてをり、いづれも著者獨特の該博な學識による緻密な研究考證の結晶でないものはなく、いやしくも東洋學に關係あるものは必ずかつては一讀を経たであらうものばかりである。内藤乾吉氏の推賞の辭によれば、著者の博學は現今の東洋學界に於て實に稀代の珍とされてゐるところであり、中國の學問はあくまで博洽を要求するに拘らず、近年の學問の専門化的傾向は學者の博洽を許さぬ所に東洋學の隘みがあるが、著者の業績はその點からいつて誠に珍重すべき珠玉の文字であることを知らねばならぬ（弘文堂發行「書窓」第八號）といはれてをつて、いまこゝに一々の論文を紹介してその價值を述べる必要はないと思ふ。

それよりもこゝに一言したいのは、著者が例言に記してゐ

られる、「わたくしは一度發表した論文でも常に補訂を試み追記を書くことにしてゐるので、本書所收のものには最初發表したものと内容の異なるものが多い、加筆した年月は各篇の末に必ず明記してある」といふ著作に對するあくまで熱心にして克明なる態度である。一文が活字になればそれで以てすでに事終れりとし、或ひは甚しきに至つては謬論をも固執して他人の注意に耳を傾けざるがごとき徒はこれを聞いて慚死すべきであらう。この點こそわれ／＼後學のもつとも篤とすべきところである。「明の陳誠の使西域記に就いて」をある必要から最初發表された東洋學報十六卷三號（昭和二年九月）と本書について比較してみたが全面に亘つて非常な改補が施されてゐるのに一驚したことがある。明實錄等によつて大きな補訂をされたところが十餘箇所もあり、その他の小補に至つては枚擧に遑がない。これは昭和五年十月に補訂された旨記されてあるが、そのあとに後年の附記が二則あり、卷末にも追記が二條加へられてゐる。後者は昭和二十三年十月と記されてあつて、印刷校了の直前まで補訂が行はれてゐたことがわかるのである。きつと著者はまたこの上にも補訂の朱筆を加へてゐられることであらうと思ふ。十一篇の論文はいづれもかつて一度發表されるや、斯界の注目を浴びたものであるが、かうして著者最近の定論は本書をまつて始めてうがゞはれるものであることを注意したい。

〔日比野丈夫〕